

映画「あちらにいる鬼」を拝見して

仁木 陽子

自分」だと思われたに違いない。

令和五年三月、徳島ニューノーマル映画祭で、徳島に縁のある映画として上映されていた「あちらにいる鬼」を見た。

令和四年十一月十一日に全国公開された映画で、監督は廣木隆一氏、脚本は荒井晴彦氏。お二方ともベテランの監督と脚本家である。

主人公の長内みはるは瀬戸内寂聴さんがモデルだ。演じているのが寺島しのぶさん。

一番に思つた事は、寺島しのぶさんの演技が凄かつたことである。スクリーンに映し出された表情、所作、口調、歩き方まで寂聴さんになり切つていた。寂聴さんがご覧になつたとしても、スクリーンに映し出されたその姿は「ご

きつぱりと話す口調は寂聴さんそのもので、美しい着物姿の動きや、戸惑い苦悩する表情を見ると、「確かに長内みはるは寂聴さんだ」と、観客を納得させる力があつた。着物をさりげなく美しく着こなし、裾を乱さず歩く姿、草履の足さばき、そして走る。階段を駆け下りる。そんな荒業も着物姿で自然にやつてのける。そして背筋を真つ直ぐに通した姿勢にも……。寺島しのぶさんが演じている長内みはるのすべてから、寂聴さんの内面が溢れ出ていた。演技とは一体何だろう。改めて考えさせられた。実在する人物を演じる事はとても難しい。姿、形を模倣する事と、演じる事とは違う。外觀がいくら似ていても寂聴さんとは

思えないこともあるだろうし、外観が似ていなくても、寂聴さんだと思うことがある。

それが演技の成せる技なのだ。

寺島しのぶさんは寂聴さんを観察する機会があつたのだろうか？ 寺島さんが演じた長内みはるは確かに寂聴さんであつた。

原作は井上荒野氏の小説「あちらにいる鬼」である。（このあとネタバレになります）

この小説は小説家の井上光晴氏と奥様、そして寂聴さんと同居している男の四角関係が描かれている。小説家の井上荒野氏は光晴氏の長女だ。

夫の浮気？ いえ、浮気などと片付けられない密な関係。妻の立場。その苦悩と悲しみ。そして嫉妬。プライドもある。夫の態度も許せない。夫の白木篤郎は豊川悦司さん、妻の白木笙子は広末涼子さん。どちらもベテラン俳優で、みはると同居している小桧山真二を演じているのが高良健吾さん。若いながら中堅のしつかりとした演技をする俳優である。ここまで役者が揃うと、登場人物のそれぞれの立場でのぶつかり合いで、見応えのある演技が火花を散らす。

長内みはると白木篤郎の出会いは徳島での講演会だった。篤郎はみはるに接近し、着物や帯、そのセンスの良さを褒めちぎる。みはるもやがて篤郎に興味を持ち、作品を読んで惹かれるを感じる。関心を寄せて篤郎に接するようになり、みはるは団地を舞台に小説を書きたいので案内してほしいと、篤郎の住む団地に出かける。

帰りのバス停で、妻の笙子と会い、篤郎は紹介する。

篤郎は女性関係についてはだらしない。笙子は篤郎の不始末の後始末をして帰ってきたところだつた。嫌な役目は妻に任せて、自分の思いのままに行動する篤郎。客観的に見ていいながら、やがてその渦に入つてしまふはる。

ある日、みはるが真二と同居している家に訪ねて来た篤郎と酒を飲む。そこに真二が帰つてきて、ウイスキーを酌み交わす。篤郎と真二はみはるとの関係を互いに探り合う。真二は満州でみはるの元夫の教え子だつた。徳島に戻つて再会し、みはるは真二と駆け落ちをした。四歳の子供を徳島に残して。

篤郎は四歳の時に母が男と出奔した。

「君と私はまるで母と捨てられた息子のようだ」と、みはるに言う。二人は縁を感じる。

みはるは新しく書いた原稿をまず篤郎に読んでもらう。篤郎はその原稿に赤を入れる。篤郎の指摘には絶対的な信頼を寄せているから、みはるは篤郎の住む団地の近くの喫茶店にまで足を延ばす。そして篤郎は地方でのみはるの講演先に現れて男女の関係を結ぶ。

みはるは京都に家を買い、真二と別れる。そして妻のいふる篤郎との関係にも悩み、別れた方がいいと思いつながら、

みはるは心と体の間で葛藤を繰り返す。

ある日、篤郎がみはるのファンだという若い女を二人連れて訪ねてくる。サインをしてあげなさいと言う篤郎に、みはるは苛立ちを覚える。馴れ合いのような関係に嫌気がさす。みはるはお座敷遊びをしたり、若い男と関係を持つてみたり。やがて篤郎と本気で別れるには出家するしかないと考える。

「何故出家するんだ?」といふ篤郎に、

「どちらかが死ななきや別れられないのよ。あなたが死ぬのは嫌だから私が出家するの。出家つて生きながら死ぬことでしょ」と、みはるが言う。

出家が決まると、篤郎はみはるの家にまで行き、みはると一緒に風呂に入り剃髪する髪を洗つた。みはるへの未練

も一緒に洗い流すかのように。みはるが出家するということとは、自分との別れを決心したのだということを感じ、篤郎は認めたくなかつた。

みはるの得度式の日、篤郎は笙子から「行つてあげた方がいいんじゃないの」と言わされて中尊寺まで行く。

笙子は、自分から行くようにと言つたにもかかわらず、帰つてこない篤郎が気になる。

そして篤郎から「今夜は遅いから、明日帰るよ」と電話がある。

翌日、笙子は篤郎の友人の秦に身を任せた。笙子の大好きな秘密。その帰りに、駅で偶然篤郎と一緒にになり、二人で鰻を食べる。同じものを食べ、みはるへの思いを互いに抱きながら、あたかも何も気にしていないよう振舞う一人。これからも別れることなく夫婦でいることを感じながら……。

篤郎が癌になり、死を目前にしている病室にみはるが見舞いに訪れる。帰り際、病院の外から篤郎の病室に向かつて手を合わせる。

映画はタクシーに乗つて帰るみはるのアップで終わる。しかし小説はまだまだ続く。

寂聴さんの得意式の様子はテレビでも放送されたので、私の記憶にも残っている。

だから、この映画に描かれているものは脚色もあるのだろうが、事実なのだと感じてしまう。年下の男との駆け落ち。そして井上光晴氏と出会い、お互いの作品を認め合い、高め合って関係を深めていった。何人の女性と深い関係になる夫を支える妻。

何処にでもありそうな話だが、誰もが経験する話ではない。その渦中に入つたら苦しむだろうと想像出来るから飛び込めない。その茨の道を歩く決断は出来ない。

しかし寂聴さんは飛び込んだのだ。

寂聴さんが出家を考えたのは、自分の人生に関わった人たちへの贖罪であつたのかもしれない。数珠を手にされて、心から手を合わせる姿を拝見していく感じた。

そしてその苦悩の果てで掴んだものが、全てを受け止める悟りだつたのかもしれない。

この映画には、全てをさらけ出した寂聴さんの覚悟が見えた。

人は、いつかはあちらに行く。しかし、死後もその名前が生き続けることは難しい。

瀬戸内寂聴さんは、その数少ない徳島出身の小説家なんだ。

女として小説家として貫いた人生の選択をされた寂聴さんには尊敬を込めて。

参考資料

『あちらにいる鬼』 井上荒野 著 朝日新聞出版
「シナリオ」2022年12月号 「あちらにいる鬼（準備稿）」
井晴彦 著 （協）日本シナリオ作家協会